

簿記・会計 解説

第2問

問1．資料2の試用仮売上の勘定元帳から試用品勘定の残高は $90 - 62 = 28$ となる。

問2．資料1の取引の仕訳は以下の通り

21日：	売掛金	15	売上	15
	： 試用仮売上	28	試用売掛金	28
22日：	未着商品	25	買掛金	25
23日：	積送品	16	仕入	16
24日：	資本金	5	仕入	5
25日：	前受金	8	売上	20
	売掛金	12		
28日：	仕入	25	未着商品	25
30日：	仕入	16	積送品	16
	現金	18	売上	18

これより資料2の総勘定元帳は以下の通りになる。

買掛金			
		993	1070
	12/22 [未着商品]		(25)

売上			
		45	1930
	12/21 (売掛金)		15
	12/25 [諸 口]		(20)
	12/30 現金		(18)

仕入			
		1050	28
12/28 (未着商品)	25	12/23 [積送品]	16
12/30 [積送品]	16	12/24 [資本金]	5

試用仮売上			
		62	90
12/21 (試用売掛金)	(28)		

以上より

ウ：3．未着商品 エ：0．諸 口 オ：2．積送品 カ：9．資本金

問3．資料3の事項を仕訳を行うと以下の通りになる。

- 1-(1)：貨物代表証券を売ったため、商品は「未着商品」として仕訳をしている。
 売り上げについては「未着商品」を「仕入」に置き換えて仕訳を行う。

仕 入 14 未着商品 14
 売掛金 20 売 上 20

- 1-(2)：資料4より現金の残高は

残高試算表 147 貸借対照表 154

であるため、現金の差額は $154 - 147 = 7$ (借方) である。このうち ¥ 3 は立替金の受取り分で、残額の ¥ 4 は原因が不明であるため雑益となる。

現 金 7 立替金 3
 雑 益 4

- 1-(3)：不渡手形 ¥ 6 を貸し倒れとして処理するが、資料4より貸倒引当金は ¥ 5 であるため、残りの ¥ 1 は貸倒償却として仕訳をする。

貸倒引当金 5 不渡手形 6
 貸倒償却 1

以上の未記帳事項により修正した残高試算表は以下の通りになる。

勘定科目	残高試算表	
	借方	貸方
現金	147	
当座預金	181	
受取手形	()	
不渡手形	6	
売掛金	120	
貸倒引当金		5
有価証券	84	
繰越商品	118	
未着商品	14	
立替金	12	
備品	320	
備品 減価償却 累計額		()
支払手形		59
買掛金		[キ][ク]
借入金		200
資本金		500
売上		1,[ケ][コ][サ]
仕入	1,492	
給料	232	
支払家賃	90	
支払利息	4	

勘定科目	残高試算表	
	借方	貸方
現金	154	
当座預金	181	
受取手形	()	
不渡手形	0	
売掛金	140	
貸倒引当金		0
有価証券	84	
繰越商品	118	
未着商品	0	
立替金	9	
備品	320	
備品 減価償却 累計額		()
支払手形		59
買掛金		[キ][ク]
借入金		200
資本金		500
売上		1,[ケ][コ][サ] +20
仕入	1,506	
給料	232	
支払家賃	90	
支払利息	4	

(金額が変更したものは太字で書かれている。金額 0 の箇所は実際は 0 を書く必要はないが、備忘として記入している)

2: 繰越商品の仕訳は以下の通り

仕入	118	繰越商品	118
繰越商品	135	仕入	135

3: 残高試算表と 1-(1) の仕訳から売掛金の修正後の残高は 140。一方、受取手形の残高は不明である。以上より見積もる貸倒引当金は

$$(\text{受取手形} + 140) \times \frac{4}{100}$$

となる。1-(3) から残高試算表の貸倒引当金は ¥ 0 になった。その後、上の見積もり分を引当金にあてている。貸借対照表から引当金が ¥ 8 と書かれているため

$$(\text{受取手形} + 140) \times \frac{4}{100} = 8 \Rightarrow \text{受取手形} = 8 \times \frac{100}{4} - 140 = 60$$

貸倒引当金の仕訳は以下の通り

貸倒償却	8	貸倒引当金	8
------	---	-------	---

4: 備品の 1 年ごとの減価償却費は

$$320 \times \frac{9}{10} \times \frac{1}{6} = 48$$

よって償却する際の仕訳は

減価償却費	48	備品減価償却累計額	48
-------	----	-----------	----

また、備品は × 3 年 1 月 1 日に取得したため、残高試算表では 2 年分の償却分が累計されている。その減価償却累計額は ¥ 48 × 2 = ¥ 96。

5: 有価証券の評価の変更による仕訳は以下の通りになる。

有価証券評価損	21	有価証券	21
---------	----	------	----

6: 家賃は毎年 4 月 1 日に 1 年分を前払いしている。そのため、決算では支払家賃のうち前払分 (翌年の 1 月 ~ 3 月分) を前払家賃に繰延べしなければならない。また決算の翌日には前払家賃を支払家賃へ再振替をしなければならない。このため残高試算表の支払家賃の金額は

$$\times 5 \text{ 年 } 1 \text{ 月 } \sim 3 \text{ 月 } (3 \text{ か月分}) + \times 5 \text{ 年 } 4 \text{ 月 } \sim \times 6 \text{ 年 } 3 \text{ 月 } (12 \text{ か月分}) = 15 \text{ ヶ月分}$$

が含まれている。家賃の見直しは行われていないため、1 か月の家賃は同額である。よって 1 か月の家賃は $90/15 = 6$ である。このうち 3 か月分を前払家賃に繰延べるため、仕訳は以下の通りになる。

前払家賃	18	支払家賃	18
------	----	------	----

8：借入金の利息は1年で $200 \times \frac{3}{100} = 6$ 。よって1か月当たり $6/12 = 0.5$

8月に利息を支払った後、翌年2月まで利息は支払われないため、9月～12月の4ヶ月は未払となる。よって仕訳は以下の通りになる。

支払利息 2 未払利息 2

以上より精算表は以下の通りになる。

勘定科目	残高試算表		整理記入		損益計算書		貸借対照表	
	借方	貸方	借方	貸方	借方	貸方	借方	貸方
現金	147		7				154	
当座預金	181						181	
受取手形	(60)						[ト][ナ]	
不渡手形	6			6				
売掛金	120		20				(140)	
貸倒引当金		5	5	8				8
有価証券	84			21			63	
繰越商品	118		135	118			135	
未着商品	14			14				
立替金	12			3			9	
備品	320						320	
備品減価償却累計額		(96)		48				[ネ][ノ][ハ]
支払手形		59						59
買掛金		[キ][ク]						()
借入金		200						200
資本金		500						500
売上		1,[ケ][コ][サ]		20		()		
仕入	1,492		132	135	1,[シ][ス][セ]			
給料	232				232			
支払家賃	90			18	(72)			
支払利息	4		2		[ソ]			
	()	()						
雑益				4		[テ]		
貸倒償却			9		[タ]			
貸倒償却費			48		(48)			
有価証券評価損			21		[チ][ツ]			
前払家賃			18				[ニ][ヌ]	
未払利息				2				(2)
当期純利益					85			85
			397	397	()	()	()	()

この表より

仕入から 1, [シ][ス][セ] = $1,492 + 132 - 135 = 1,489$.

支払利息から [ソ] = $4 + 2 = 6$.

貸倒償却から [タ] = 9.

有価証券評価損から [チ][ツ] = 21.

雑益から [テ] = 4.

受取手形から [ト][ナ] = 60.

前払家賃から [ニ][ヌ] = 18.

備品減価償却累計額から [ネ][ノ][ハ] = $96 + 48 = 144$.

よって損益計算書の借方の総額は

$$1,489 + 232 + 72 + 6 + 9 + 48 + 21 + 85 = 1,962$$

一方、貸方は雑益の額が 4 であるため、売上 = 1,958. 以上より 1, [ケ][コ][サ] = $1,958 - 20 = 1,938$.

また貸借対照表の借方の総額は

$$154 + 181 + 60 + 140 + 63 + 135 + 9 + 320 + 18 = 1,080.$$

一方、貸方の買掛金以外の総額は

$$8 + 144 + 59 + 200 + 500 + 2 + 85 = 998.$$

よって買掛金の額は [キ][ク] = $1,080 - 998 = 82$.